

聴衆を前にしてピアノ演奏するまで

松 井 春 枝

キー・ワード：集中力、忍耐力、想像力

「あんなに練習したのに……」とは師事した先生の落胆のため息だった。今日のステージのために必死で練習したにもかかわらず、ちょっとしたミスが元で頭の中が真っ白になり、次に弾くべき音もわからなくなって惨澹たる結果に終わってしまったのだった。

その後も程度の差こそあったが、ステージに上がると思わぬ失敗の連続だった。何かが欠けている。「元々気の弱い性格なのだから仕方がないのだろう。」と他人が思ったとしても、我が身が我が身を見捨ててはいけない。

日頃実に真面目に勉強している学生が、試験というとなんでもない失敗をしてしまう。友人が、その学生にいった。「あんたがどんだけ真面目に練習してるかは皆知ってるんやから自信もって弾かなあかんよ。」この、友人の的確な励ましの言葉が今も我が事のように心に深く刻まれている。

聴衆を前にして自分の実力を出すための秘訣はない。しかし失敗を最小限に留められるであろう練習方法、演奏への心意気はあるに違いない。

まず、演奏する楽曲の選択段階から考え直してみよう。

ピアノのための楽曲は実に豊富であるが、自分に適した曲を選択するとなると様々な条件を考慮せねばならない。

楽曲の選択方法

1. 自分の技量に相応しい作品。
2. 内容が理解できる作品。
3. 敬意をはらって演奏できる作品。
4. 演奏会の条件に合った作品など。

技量については過去の練習の積み重ねによってどの程度の楽曲を弾き熟す事ができる技術があるのか判断することができる。しかしいざ楽曲の練習を始めてみると、「果たして技術面を克服できるだろうか」と懸念する。でも毎日弛まぬ努力によってだんだん早く指がまわるようになる。最初は跳躍した音を弾くたびに違う音へ跳んでいたが、何時しか正しい音に跳べるよ

聴衆を前にしてピアノ演奏するまで

うになる。指が鍵盤上をあちらこちらに跳び回っている内に鍵盤と指が次第に仲良しになっていく。その結果、鍵盤が指を弾くべき音へと導いてくれるようになる。硬い鍵盤に何度も何度も指を当てた痛みや腕のだるさが嘘のように軽やかに自由自在に動くようになる。やっと練習の成果が感じられた安堵の瞬間がきた。弛まぬ根気強い練習によって必ず到達できるし、又到達せねばならない瞬間である。

選択した楽曲の内容を本当に理解する事は容易ではない。

例えばモーリス・ラヴェルがどのような心意気で「クープランの墓」を作曲したか。この曲は第1次世界大戦で戦死した友人の冥福を祈って彼らにささげられた曲である。それなのに軽快な明るい曲だといって当時非難されたそう。彼の当時の心境を理解していただろうか。この曲は17世紀から18世紀の大作曲家クープランをラヴェルは大変尊敬していて彼への賛美、そしてフランスの伝統音楽への賛美から生まれた曲と考えられている。組曲になっていて古い舞曲の形式を用いている。クープランを模倣したが、ラヴェルでなければできない曲ができあがった。友人の冥福を祈る気持ち、クープランの世界へ想像を膨らます心情、それらをピアニストがどれだけ理解して演奏できるだろうか。

作品について敬いかつ愛情を注ぐ事ができればきっと楽譜が作曲者の意図した考えを奏者に語りかけてくれる。イメージーションを膨らませてくれる。楽譜を媒介として作曲者と会話が出来た時の満足感は何にも替えがたい。一心不乱に練習したとき、楽譜は音符の印刷物から生きた音楽を指し示すようになる。曲をそしてその作曲者に対する直向きな愛情こそが、楽曲の演奏方法を導く鍵となる。しかし作曲者の期待にこたえられるだけの音楽的資質をもっているかどうかは、熱意だけで解決できない問題である。

演奏会の条件については、聴衆、会場、演奏時間などについて、ある程度の経験があれば曲の選択に困難はない。

さて、能率よく練習するにはどうすればよいのだろうか。せっかく必死で練習したにもかかわらず本番で頭が真っ白になってしまうとはどういう事なのだろうか。

練習方法

まずピアノに向かって簡単な指練習を行うが、常に頭脳が先に立ってその方法の良し悪しを判断しながら先へ進めていく事が大切である。簡単な練習だからといって、頭が他の事を考えているようでは上達は臨めない。指が正しい位置で均等な響きを持って演奏されているかどうか聴くのは耳であり、それを判断するのは頭である。心地よい音を出すためにはどのような弾き方をせねばならないか知っているのは頭である。指は頭の命令に従って動いているだけなのだから。すべてを取り仕切っているのは頭なのに、最初のうちは指だけに任せているという事はないだろうか。ゆっくり練習する事は指が早く回らないからという理由もあるが、頭に今弾いている音の意味を指と同時に考えさせる時間を与えるためでもある。ゆっくりそして頭の回

転が良くなれば次第に早く弾く訓練をしよう。

さて練習の目的である楽曲の勉強についてであるが、譜面を見て最初から相当なレベルで演奏できるわけではない。まず1曲を最初から最後まで弾いてみよう。ある程度のテンポで弾けるだろうか。とても困難で楽譜を前に考え込んでしまうようならば、奏者にとってその曲はレベルが高すぎるだろう。とにかく1回通り弾いてからいよいよ本格的な練習に入っていく。まず最初から必ず頭を使って練習する事である。今度はゆっくり片手ずつ1小節か2小節ずつ練習する。楽譜を丁寧に読むこと、何度も何度も弾くこと、その内の何度かは出来上がったときのテンポを想定し手早く弾いてみる。そして指使いを決定する。指使いは完全に楽譜に記載されていないし奏者の手の条件によっても異なる。ゆっくり弾くのに都合のよい指使いと早く弾くのに都合のよい指使いとは異なる。従って最初の内に1番弾きやすい指使いを見つけておく。仕上がった時を想定してペダルも考える。ペダルにいたっては作曲者はほとんど奏者任せになっている。音の響き、音の流れなどを考慮してペダルを決定せねばならない。

次の段階では片手ずつ何度も練習しながら暗譜することを心掛ける。和音の移り変わり、旋律の流れが頭にしっかりと刻まれるまで集中して記憶する。

今度はピアノから離れて頭だけで右手の部分、左手の部分を頭に刻んでいく。この時指の動きに頼らないで頭だけで暗譜を試みる。この方法を試みると頭がひどく疲れてしまうならば、今まで指だけを頼りに練習していたことになる。最初から頭の命令に従って指を鍛える事を繰り返しておこう。

苦労してこの方法で練習してもまだ始めたばかりの曲だから、次の日に楽譜を離して弾いてみると忘れてしまっている。もう1度昨日と同じ練習をやり直す。時間がかかっても昨日の半分の時間で昨日のレベルまで到達できる。先へ進もう。このようにして歩みの鈍い亀のように譜面を読んでいく。又次の日になると出来なくなっている。忘れてしまっている。根気強くやり直しながら毎日毎日暗譜を積み重ねていく。

暗譜というのは相当練習を重ねて仕上げの段階に入っている頃「さあ、覚えよう。」と考えるのでは遅すぎる。暗譜には指の動きより先に頭を使う事からここがけて集中して取り組むべきである。

やっと最後まですらすらとしかも暗譜して弾けたならば、今度は音楽の心に細心の注意を払って曲作りをしていく。

楽曲の仕上げ方

1. アーティキュレーション。和声、拍子、リズム、旋律を際立たせるための技術、知的理解。
2. テンポ。曲の内容に相応しい正確な速さ、各箇所に対応しいテンポ設定。
3. デュナーミク。音の大きさの違い、PP、P、mP、cresc.、dim.などの表す意味と奏法の研究。
4. 楽曲構成の解釈、分析などに関わる諸問題の研究。

聴衆を前にしてピアノ演奏するまで

弾きながら考える。机上で楽譜を熟読し考える。文献を調べる。演奏を聴く。CDによって、又生演奏によって取り組んでいる曲、同じ作曲家の異なった楽曲の演奏を聴く。そうして楽曲の内容を考察しいかなる音色によっていかなる表現方法をすればよい演奏ができるのか模索する。

楽曲に光と影を与える豊富な音色とは、弦楽器の音色、管楽器の音色あるいは打楽器の音色など、オーケストラをイメージして異なった音色を弾き分ける事によって得られる。生の演奏に耳を傾けてよい音を聞き分ける鋭い耳を養う事は、美しい音楽を作っていく為の重要な要素になる。但し、安易に他人の演奏を真似る事はしてはいけない。自分に相応しい自分の演奏、自分にしか表現できない音楽を追及するべきである。人はそれぞれ異なった姿形を持っている。人の演奏を真似ること、すなわち借り物の演奏ではどこか不自然で自分の持ち味を生かすことはできない。

さて前に述べたような方法で曲作りに専心していく。いつも頭が先に立って指を導いていく。弾けないからといって諦めない事。忍耐強く自分を見守って練習に励む事。練習の際には集中力と直向きな心を持ち続ける事。鋭い耳を持って常に自分の演奏に厳しい批判を向けること。どうすればもっとよい演奏が可能になるのか頭で考え指を導いていく。頭を使う事に加えて想像力を働かせて楽曲に抑揚をつけていく。曲を作り上げていく上でイメージを膨らませる事は、演奏が豊かな内容を持つか否かに重要な役目を担う。

例えば「クーブランの墓」の前奏曲を例にとってイメージしてみよう。

ラヴェルがお墓に出かけてクーブランに思いを馳せている情景が思い浮かぶ。お墓へと小走りにかけていく。道端にぽつん、ぽつんと堇の花が咲いている。そっと顔に触れた風がクーブランの世界へと誘っていく。懐かしそうにクーブランが語りかける。オーボエが近づいて来て「ねえ弾いてよ、ねえ」とせがんでくる。「わたしも、わたしも、」と楽器たちが次々やってきた。ゆっくりしていられない。急いでいる。でもバロックから去りがたく、楽器の言うままに戯れている。突然迷い込んだ珍客に昔の音楽たちは自由にはしゃぎ回って踊っているが、そのうち鈴を鳴らしながら消えてしまった。

情景を思うまま綴ってみた。音は1音1音が組み合わさって旋律になったとき言葉となって語りかけるようになる。なにを語っているのかを奏者は想像して演奏する。音楽を聴いた聴衆が何を語りかけられているかが想像できるような演奏でなければならない。

暗譜を確実にする方法

やっと曲が仕上がったと思われたら、今度はもう1度暗譜をやり直す。

1. 毎日一通り暗譜で演奏してみる。少しでも頼りない箇所があれば再び下記に従って暗譜をやり直す。
2. ピアノから離れて指を動かさず音を思い浮かべる事によって全曲を暗譜してみる。この時

記憶のはっきりしない左手、右手があった場合は、楽譜を見直してみる。最初はゆっくり、次第に早く頭と耳を頼りに暗譜する。

3. ピアノに向かってゆっくり片手で弾く。時々休んでいる手を加えて弾く。どの箇所でも両手が迷わずに加わることができなければならない。左手、右手を自由自在に交代して弾く。すべて暗譜で行う。

4. 人前で演奏してみる。本番の前にも公衆の前でたびたび演奏する機会をもつ事。練習の時とは異なった平静でない状態で演奏する。そこで普段間違わない箇所を間違ったとしたら、その箇所は何か欠点があると考えて練習をやり直す。

自分はどんな時、失敗するのだろうか。

自分の欠点を分析してみる。低音の飛躍した動き、静かなカンタービレの動き、あるいは急速な細かい音の動き等様々な状況が思い浮かぶ。しかしどんな場合も結局集中力の欠如からくる失敗である。多くの聴衆を前に最初から最後まで集中力を持続することこそ失敗しない秘訣といえる。

さて集中力を持続させるにはどうすればよいのだろうか。この問題は練習で克服できるとは断言できない。呼吸法、何も考えないで息を吸う、ゆっくりゆっくり吐いていく。心を落ち着かせるための呼吸法の訓練によって、穏やかな気持ちを得ることができる。雑念の入る隙を与えない心の訓練によって、無の境地を得て本番に臨む。本番では曲のことだけ考える。しかも弾いてしまった過去の事ではなくこれから弾く一步一步先のことだけを考えて弾いていく。集中していれば客席で何であろうと気付く事もなく弾けるはずだ。

このように用意周到に練習すれば、演奏に自信を持つことができる。無の境地を得て本番に臨めば平静な精神と肉体が得られる。そして一心不乱に演奏すれば失敗するはずがない。ところが理屈通りにいくとは限らない。難しいのは集中力の持続だと思う。普段より常に集中力を高めた状態で練習して本番で集中力を持続した演奏をしようではないか。

自信を持つ事、演奏が満足のうちに終えられたとイメージする。我と我が身に言って聞かせる。「練習しただけの実力は必ず出せるのだ。」と、、決して否定的な考えをもってはいけない。舞台に立つのが怖いと思っはいけない。「さあ、やるぞ、」舞台袖でボンと背中を叩いてずっと舞台へ進み出る。胸を張ってエネルギーを一杯もった状態でピアノに向かう。人生は前を向いて胸を張って堂々と歩いていくべきなのだ。

最初に述べたように演奏者の性格は舞台においても現れる。人の前で演奏するという事は己の全てを曝け出す事である。普段より己を高めるように心掛けていけば、本番でも内容豊かな演奏が可能になるだろう。己の欠点が演奏にマイナスなのかプラスなのかは聴衆が判断する事である。己を上辺だけ取繕っても真の演奏はできない。真の自分をさらけ出す覚悟で舞台に立つ事によって、聴衆に何かを訴えられる演奏ができるはずだ。

聴衆を前にしてピアノ演奏するまで

結び

1. 演奏には体の機能すべてが参加すること。特に頭、耳、指そして心。
2. 集中力を高めて忍耐強く長い期間の練習に取り組むこと。
3. 日頃より己の精神を高める努力をして感性豊かな音楽作りを心がける。
4. 演奏する曲への愛情に加えて厳しい自己批判の耳を持つ事。
5. 演奏の際は自信を持って一心不乱に集中して演奏する事。

さて、用意周到に練習したつもりでも本番で失敗する事がある。失敗しても決してあきらめないでその原因を突き止める事が大切である。失敗によってしか得られない事がある。

明日があるではないか。次回の演奏会で前回よりも磨きをかけた演奏ができるように努力を重ねていこう。